

研究ノート

作家チェーザレ・パヴェーゼの「流刑」をめぐる (1)

——流刑地ブランカレオーネを訪ねて——

中 島 梓

序

イタリア人作家チェーザレ・パヴェーゼ (Cesare Pavese, 1908-1950) の人生を追ってみると、その大きな転機となった体験のひとつに、彼の「流刑」が挙げられる。

北イタリアのピエモンテ州で幼少期から青年期を過ごしたパヴェーゼは、1935年5月15日早朝、他の知識人とともに反ファシズムの容疑によって逮捕された。なかには逮捕後すぐに釈放される者もいたが¹⁾、パヴェーゼに対しては3年の流刑宣告が下されることになる。実際には刑期途中で恩赦が認められたとはいえ、パヴェーゼは1935年8月5日から翌年3月14日までの約7か月間を、カラブリア州最南端の海辺の村ブランカレオーネで流刑囚として過ごすことになった。

流刑期間中、パヴェーゼは膨大な読書に励むとともに、詩作にも努める。生涯書き続けられ、死後には『生きるという仕事』(原題: *Mestiere di vivere*) と題されて出版されることになる思索ノートが書き始められたのも、流刑地へ向かう以前にすでに書き溜めていた詩をまとめた自身初の詩集『働き疲れて』(原題: *Lavorare stanca*) が出版されたのも、まさにこの時期であった。また、パヴェーゼは恩赦が認められてトリノへと戻った直後、すぐさま初の短編「流刑地」(原題: *Terra d'esilio*) の執筆に取り掛かり、その翌年には、初の長編「牢獄」(原題: *Il carcere*) をも書きあげる²⁾。パヴェーゼは流刑体験を機に、自身の文学表現の幅も広げたのである。

しかし、これまでパヴェーゼ研究の中で流刑体験に焦点があてられるとき、そのほとんどがパヴェーゼとファシズムとの関係性や、パヴェーゼを流刑地へと追いやる原因のひとつと考えられてきたバットィステイーナ・ピッツアルドという名の女性との関係性、あるいは流刑地でパヴェーゼが感じた孤独などといったものであり、パヴェーゼの実際の流刑生活ぶりについてはほとんど検証がなされてこなかったといえる。短編「流刑地」や長編「牢獄」がパヴェーゼの流刑体験を反映したものであるということについては長く言われてきてはいたものの、パヴェーゼ自身の流刑生活が実際にどのようなものであったのかということについては、彼の手紙や作品から類推するほかなかったのである³⁾。

そこで、2012年2月19日より約1か月間、報告者はかつてパヴェーゼが流刑囚として訪れ、暮らした地であるブランカレオーネへと赴き、パヴェーゼの流刑生活ぶりを追う手がかりを探す調査を行った。具体的には、パヴェーゼが書簡に記した場所や風景をたどりつつ住民への聞き取りを行った(本稿第1章)。また、1990年に行われた聞き取り調査の記録、『流刑という神話をめぐって』(原題: *Al mito del confino*) についても検討した(本稿第2章)。さらに、その記載内容の裏付けを行うべく、ローマにある国家中央資料館において当時の公文書資料調査を実施した(本稿第3章)。以下はその調査報告である。

第1章：ブランカレオーネの現状

[1]

1935年当時、イタリアの知的文化の発信地として中心的役割を担っていた、丘に囲まれたピエモンテ州の街トリノから、初めて古代ギリシャの文化がなおも息づく南イタリアの海辺の村ブランカレオーネへとやってきたときのパヴェーゼの驚きは、どれほどのものであっただろう。

パヴェーゼは、トリノで1935年5月15日に逮捕され、トリノの刑務所、続いてローマの刑務所へと移される。その後、ローマの刑務所で流刑宣告が下され、そこから二晩かけて列車でブランカレオーネへとやって来た。それはパヴェーゼの手紙によれば、同年8月4日のことであった⁴⁾。二人の憲兵に連れられ、手錠をはめた姿で村へとやってきたパヴェーゼを、当時の村人たちは物珍しそうに眺めていたという。パヴェーゼはそれから5日後の8月9日、姉マリーアに宛てて次のような手紙を送っている。

1935年8月9日ブランカレオーネにて

親愛なるマリーアへ

4日、日曜の午後、ブランカレオーネに着いた。村中の人々が気晴らしに駅の前で囚人を見ようと待っていたようだ。囚人は、二人の憲兵の間で手錠をかけられて、電車から決然たる足取りで降りると、役場へとまっすぐに向かった。

手錠をかけられ、大きなカバンを持っての二日間の旅は、とても有意義な旅行だった。今や家族の名前は容赦なく傷ついてしまった。ナポリの駅も、ローマの駅も、人で混み合う中を通り過ぎたのだが、人々が不吉な三人に対していかに道をあけるのかを見なければならなかった。ローマでは、海に向かう幼い少女が父親に、「お父さん、どうしてあの手錠に電気を流さないの」と尋ねた。ナポリでは、十字架の下で、手錠や大きなカバンなどもろともに刑務所にある中庭の階段で躓くのに、何の不足もなかった。するとキレネ人のシモンが、そのカバンを負ってくれた。

サレルノでは、車両を乗り換える際、通りかかった少年たちに教育的な光景となった。パエストゥムを通ったときには暗かったので、ギリシャ人の神殿を見るという満足は得られなかった。サプリでは、落穂ひろいの女たちの姿もなく外泊した。そのほかはサンタエウフェミア駅とカタンザーロ駅で、列車を乗り換えた。楽しかった。

ここでは大いなる歓迎を受けた。素晴らしい人たちであり、劣悪な状況になれながらも、あらゆる方法で僕に優しく、親切にしてくれる。自活が可能という結果のために、当局が僕にいかなる援助もしないと決めたことを聞いたら、あなたは喜ぶに違いない。いつもの結果に、いつもの上告をしよう。

ここでは僕は唯一の流刑囚である。ここの人たちが汚れているというのは、伝説である。日に焼けているのだ。女たちは路上で髪をとかし、毎日水浴びをする。豚がたくさんいて、人々は頭でバランスをとって水瓶(アンフォラ)を運ぶ。僕も習って、いつかトリノのバラエティーショーで稼いでみよう。

グラッパがどういうものかをここの人たちは知らない。もしも20本ほど瓶を送ってくれるなら、僕は飲もうと思う(本当だよ)。お金を受け取った。行政が僕の手段について意見を変えな

いのではないかと強く恐れているのだが、月に2回は同様に送金してくれるようお願いする。つねに本が入った箱が届くことを願っている。

45 リラでベッド付きの部屋を借りた。でも、毎日新たな出費がある。電気や洗面器、蒸留酒、砂糖などなど。食べ物は自分でなんとかしている、つまり冷えたものを食べている。家族もなしに所帯をもつのはよくないことだ。

浜辺はイオニア海に広がっている。ほかのあらゆる浜辺と似ていて、まるでポー川のような。遅れていたたくさんの葉書を受け取った。

要するに、本とお金、友情の挨拶だけを乞うているのだ。

チャウ⁵⁾

一読すればわかるとおり、この手紙にはローマからブランカレオーネまでの移動の様子とブランカレオーネに到着した際の様子、始まったばかりの流刑囚としての生活ぶり、南イタリアの人々の様子や南イタリアの自然を目の当たりにして抱いた驚きなどが、随所に皮肉な冗談を散りばめて記されている。

パヴェーゼが80年以上まえに二晩かけて列車を乗りついただというローマからブランカレオーネまでの行程は、今ではローマからレッジョ・カラブリアまで飛行機で1時間足らず、そこからブランカレオーネまで車を使って30分足らずでたどることができる。



カラブリア州の州都レッジョ・カラブリアからブランカレオーネまで海岸沿いの国道を走ると、その片側には、短草の隙間にところどころ白っぽい岩肌が露わな、荒涼とした山々が連なる光景が広がっている。山裾には放牧された羊や山羊の姿も時折見かけられる。もう片側には、真っ青なイオニア海がある。

途中、ボヴァ (Bova) という村を通り過ぎた。そこでは今なおグレカニコと呼ばれるラテン語とギリシャ語が入り混じったかのような言葉が村の年寄たちのあいだで使われているそうである。そしてオデュッセウスが眼前の海を渡ったとされるカーポスパルティベントの灯台横を通り過ぎれば、間もなくブランカレオーネに到着する。

海や山はパヴェーゼがいた頃とほとんど変わらぬ姿をとどめているのだろう。しかし、パヴェーゼが流刑囚として訪れた海辺の村ブランカレオーネの人々の暮らしぶりや村の様子は、もはやすっかり変わってしまったといってよい。1950年代を境に、ブランカレオーネは農村から観光の村へと姿を変えた。この地は昔からベルガモットやジャスミンの栽培地として広く知られているものの、そのベルガモットやジャスミンを実際に栽培しているのは、今やインド系の移民たちのみである。村の若者の多くは、大学進学時に村を去り、そのまま別の街で就職先を探すのだそうだ。

ブランカレオーネを東西に貫く国道を挟んで、道路沿いにはパヴェーゼがいた頃には存在しなかったにちがいないレストランやホテル、商店などが並んでいる。このあたり一帯は、夏になると内外からの海水浴目当ての観光客で大変な賑わいなのだという。しかし、夏の観光地として有名な

この村を、冬に訪れる者はほとんどいない。レストランやホテルはそのほとんどが閉まっており、人口3000人足らずの小さな村は、ただ静まり返っている。耳に届くのは、延々と繰り返される海の波音と1時間に2本通る電車の警笛、時折吹く強い風の音ばかりである。

海岸沿いにあるブランカレオーネの中心地は、正しくはブランカレオーネ・マリーナと呼ぶ。この中心地を走る国道沿いに並ぶ建物のうちの1軒に、かつてパヴェーゼが暮らしたパラッツォがあった。訪ねてみると、パラッツォの現在の所有者トニーノ・トリンガリ (Tonino Tringali) 氏は、突然の訪問にも拘らず、パヴェーゼが月に45リラで借りて暮らしていたというその部屋を快く見せてくれた。

パヴェーゼが暮らした部屋には、まるでパヴェーゼが使っていたかのような古めかしいベッドや机、旅行鞆などが置かれている。しかし、実際にこの部屋に残る当時のままのものの例えば、グレー、赤、白の、三色のタイルが敷かれた床のみである。置かれている家具等は、最近になってそれらしいものが用意されたにすぎない。



パヴェーゼが滞在した部屋を含むパラッツォ自体は、1929年に完成したようだ。したがって、パヴェーゼがこのパラッツォの一室を

間借りした当時は、まだ完成したばかりの真新しいパラッツォだった。しかし、建築当初からパヴェーゼが暮らした部屋は水はけが悪く、しばしばゴキブリが姿を現した。ゴキブリが出ると、パヴェーゼは決まって家の近くにいる少年らに退治するようお願い出て、退治してもらった際に小遣いを渡していた。

トリンガリ氏が村人から伝え聞いた話として語ってくれた、パヴェーゼの流刑地での暮らしぶりにまつわるこうしたエピソードが、果たして当時のパヴェーゼを実際に知る者によって語り継がれてきたものなのか、あるいはパヴェーゼ自身の手記や作品を手掛かりに誰かが語り継いできたものなのか、その点にははっきりしない。しかし、パヴェーゼが部屋に出没するゴキブリに困っていた様子は、流刑地から姉に書かれた手紙のなかにも確かに記されている。パヴェーゼは自分の部屋に出没するブランカレオーネのゴキブリが、トリーノのそれとは違いどれほどの大きさかということに触れ、自身の流刑生活の窮状や劣悪な環境を訴えているのである⁶⁾。

パヴェーゼが庭先から眺めたはずの風景のなかにも、当時の面影はもはやほとんど残っていない。パヴェーゼが流刑地に来て2週間目の8月19日付、姉マリーアへの2通目の手紙の中には、「僕の部屋のまえには、小さな庭がある。そして、線路が走り、海がある」という記述が見られる⁷⁾。かつては確かにこの手紙の記述のとおり、線路の向こうには砂浜と海が広がっていたのだそうだ。しかし、今では庭先にある鉄道の向こう側にもパラッツォが点在する。さらにその先にも新たな海岸通りが設けられており、そこにはいかにも夏の観光地らしく、ヤシの木が整然と並んでいる。

トリンガリ氏の話では、パヴェーゼの部屋はそのままに、パラッツォの地上階部分をB&Bとして近く開業予定だそうである。改装工事をほとんど終えた、小さな寝室とキッチン、居間、会議室を備えたB&Bは、アルベル・パヴェーゼ (Alber Pavese) という名にすることがすでに決まっていた。

[2]

パヴェーゼが流刑地に来て2週間目、8月19日に姉に宛てて書かれた手紙には、流刑地での暮らしが記されている。

…ブランカレオーネにはうんざりしている。朝は早く起きる、牛乳の配達が来るころに。それからアルコール器具の上で、自分の分である4分の1を沸騰させる。昼までそのままにしておく、固まってしまうからだ。そのあとコーヒーを飲み、パール・ローマに行く。本を読んだり詩を作ったりしながら、10時までそこにとどまる。だが、とても暑く、環境がずいぶん異なるので、わずかしか進まない。山の災難が怖いので、必ずガゼッタ・デル・ポポロ紙を見る。それから海に行く。はじめは海水浴をしたけれども、耳に塩水が入って神経痛が起こったので、もう水には入れない。この楽しみも去ってしまった。帰りながら、パンや果物の買い物をする。正午、沸かしておいた牛乳を飲み、パンや果物を食べたり、オリーブ油で焼いた卵を食べたりする。卵は小さなフライパンを使って自分で焼く。それから昼寝しようとするのだが眠れず、4時まで本を拾い読みする。5時に役場に出頭するために出かけ、帰りには村の中心部で詩を作ろうと試みたり、おしゃべりしたりするのだが、退屈だ。あまり買い物をしない日にはビールを飲みに行く。7時に部屋へ戻り、昼と同様の夕食を作る。皿を洗う。午後8時までは、詩を書こうと家のあたりをぶらつく。そして家に戻り、ベッドにもぐりこむ。キニーネの錠剤を飲んで。⁸⁾

この手紙に読まれるパヴェーゼの朝の日課のひとつとなっていたパール・ローマまでの道のりを、パヴェーゼが流刑期間中滞在していた部屋から実際に歩いてみると、どれほどゆっくりと歩みを進めてみても、ものの5分で到着する。

また、パール・ローマにたどり着くそのすぐ手前には、パヴェーゼが毎日夕方5時に通ったと手紙に記す役場がある。ここは1960年代に火事に遭遇し、それを機に全面的に立て直しがなされたそうなのだが、役場の位置自体は当時のままである。



こうして実際に歩いてみると、ブランカレオーネという村自体が驚くほど小さく、流刑地での日常におけるパヴェーゼの行動範囲がごく限られたものであったということに改めて気づかされる。

ちなみに、パール・ローマはパヴェーゼが去って以降、今日までのあいだに内装が全面改装された。しかし、今なお村人たちの憩いの場のひとつであることに変わりはない。また、壁脇にはパヴェーゼについて記された新聞が飾られている。パールのオーナーはインターネット上にパール・ローマを紹介するホームページを開設しており、パヴェーゼがこのパールに足しげく通っていたということを大々的に記している。

パールの上階部分は、かつてはホテルとして利用されていた。パヴェーゼ自身も、ブランカレオーネにたどりついた直後はそのホテルに滞在していた。しかし、ホテルはその後閉業され、長い間、物

置部屋として使われてきた。今は特に何にも使われぬままだという。

[3]

パヴェーゼが流刑地に来てまだ間もないころから、単調な海の様子や日々の暮らしに嫌悪感を抱きつつ海岸で読書と詩作にふけて暮らしていた様子は、先に挙げた手紙からもうかがえる。イオニア海に寄り添って暮らし、この海的美しさを何よりの誇りにしている、現在この村に住む人々にパヴェーゼについて問うとき、みなが口にするのは、パヴェーゼが海を憎んでいた、ということである。

イタリアで20世紀を代表する作家のひとりであるパヴェーゼが、わずかな期間ではありながらも流刑囚としてこの村に滞在していたということを、村人らはほとんど全員が知っている。しかし、パヴェーゼのことを快く思っている人は少ない。当時のパヴェーゼを記憶している人はもはやごくわずかしか存命ではなく、その中でまともに会話できる人物はただ1人である。そしてその人物は、「彼はとても気難しく無愛想な人物だった」と、声を荒げて報告者に語ってくれた⁹⁾。

もう少し若い世代の、パヴェーゼが描いた詩や小説を読むことによって、あるいはそれらパヴェーゼが残した作品等を読んだ人たちから伝え聞いたことによって、パヴェーゼが作品に描いたブランカレオーネについて知った人たちは、「彼が作品に描いたブランカレオーネはみすぼらしすぎる。パヴェーゼは彼の故郷サント・ステーファノ・ベルボには大いに貢献したが、ブランカレオーネにはあまり貢献してくれていない。彼が描いたブランカレオーネは真実のブランカレオーネではない」と嘆く。

村人たちのパヴェーゼに対する複雑な心境は、たとえば村の海岸通りに最もよく表れている。

村の観光地化のなかで新たにもうけられた美しい海岸通りのはずれに、パヴェーゼ広場と名付けられた小さな広場がある。ただし看板も何もないため、村人から教わりもしない限り、外からきた人間にはそこがパヴェーゼ広場と名付けられた広場であるとはわからない。

この広場には、ごく最近までパヴェーゼの胸像が建立されていた。しかしその胸像は、ある晩、村の何人かのいたずら者の仕業によって土台から取り外されてしまった。取り外された胸像は、翌朝、小舟の上で発見されたのだという。

報告者がブランカレオーネを訪ねたとき、本来胸像があったはずの場所には、ただ土台のみが残っていた。土台に名前や碑文などが記されているわけではないため、植え込みの葉のあいだに隠れるようにしておかれたその土台が一体何のためのものなのか、これも外からきた人間には到底わからない。

小舟の上で発見されたというその胸像を、報告者は後に役場の入り口にある階段の踊り場で見ることができた。役場の人によれば、いずれ修復に出す予定だそうである。しかし、特に修復を急いでいる様子は見られなかった。役場の入り口付近の床の上にぞんざいに置かれたそれがパヴェーゼを模ったものであるということに、報告者は役場の人に知らされるまで全く気づかなかった。



[4]

こうして村のパヴェーゼにまつわる建物や場所を実際に訪ねてみてわかったこと、それは、今やイタリアの20世紀を代表する偉大な作家のひとりとしてその名が挙げられるパヴェーゼを、近年、ブランカレオーネでは村おこしの材料のひとつとして利用し始めているものの、それが今のところはあまりうまくいっていないという現状である。

考えてみれば、ブランカレオーネを訪れた当時のパヴェーゼは、まだ27歳であり、若くて博学な、北イタリアからやってきた単なるひとりの流刑囚であった。そして、わずか7か月あまりをそこで過ごしたにすぎない。パヴェーゼが後にイタリアにおける20世紀を代表する作家になるということなど、おそらく誰も考えはしなかつただろう。

今では村の広場や図書館にその名が冠され、村のガイドブックやホームページにもパヴェーゼについての紹介文が掲載されている。間もなくパヴェーゼにちなんだB&Bも開業されようとしており、海辺の村ブランカレオーネに、夏の海水浴目当ての観光客以外に、文学好きの観光客をも呼び込もうとする村の意図が見え隠れする。

もしかしたら、パヴェーゼの生まれ故郷であるサント・ステーファノ・ベルボがそうであったように、パヴェーゼにまつわる建物や、パヴェーゼ作品を忍ばせるような石碑などが、ブランカレオーネの随所に設けられることになり、「パヴェーゼがかつていた村」として観光客にアピールできる日が来るのかもしれない。しかし、現在の村人の中でパヴェーゼがあまり好意的には受け止められていない点、当時のままに残るものがほとんど存在しない点、また、パヴェーゼ自身による流刑地を舞台にした作品や流刑地で書かれた手紙のなかに、流刑囚としての生活や流刑地ブランカレオーネに関する好意的記述があまり見られない点などを考えると、仮にそのような日が訪れるにしても、それはまだまだ先のことなのではないかと思われた。

第二章：ジョヴァンニ・カルテーリ 『神話という流刑をめぐって』

[1]

ブランカレオーネにはパヴェーゼにちなんだものやパヴェーゼが作品に描いた光景を忍ばせるものがあまりにも少なく、村人への聞き取りを行っていても当時を知る者がもはやほとんど残ってい

なかった。また、現在の村人たちにパヴェーゼは冷やかに受け止められていることなどからも、調査は予想以上に難航した。しかし、では日本からわざわざブランカレオーネを訪ねる意味などなかったかといえ、決してそうではなかった。

村人たちに何とか聞き取りを試みようとするなかで報告者にとって意外だったのは、パヴェーゼがブランカレオーネにいた当時、ブランカレオーネに他にも流刑囚が数名いたということや、パヴェーゼが村の子供たちに、流刑期間中、ラテン語の個人指導をしていたということなどを、数名の口から聞き知ったことである¹⁰⁾。

パヴェーゼが村にいた当時のことをうろ覚えではありながらも記憶する村人ジュゼッペ・フレノにその点を確認したところ、彼は自信を持って、「名前は覚えていないが、他にも流刑囚はいたし、確かにパヴェーゼは村の子供たちにラテン語を教えていた。わたしの友人マンガラヴィーティも、パヴェーゼの生徒のなかのひとりである。ほかにも、巡査の子供がパヴェーゼからラテン語を習っていた」と語ってくれた。

パヴェーゼは、流刑地に到着して間もない頃に記した姉への手紙のなかで、自分がブランカレオーネで唯一の流刑囚であるということを書き記していた。また、村の子供たちにラテン語を教えていたということについては、残された手紙や彼の作品からはうかがい知ることができない。ましてや巡査の子供にもラテン語を教えていたということは、本来パヴェーゼを取り締まるはずの巡査とパヴェーゼとの間にかかなり親しい関係があったことを思わせる。

手紙や作品からパヴェーゼの流刑囚としての生活ぶりを類推する限り、単調な日常生活のなかでパヴェーゼがただひたすら海に対する嫌悪感を強めていたことや、村人たちと語らいはするものの彼らとの間に一定の距離をもうけ、時に喘息の発作に苦しみ、郷愁と孤独にさいなまれていた様子などが読み取れる。

その一方で、パヴェーゼの流刑体験をもとに書き上げられたとされる「流刑地」や「牢獄」に目を向けてみると、主人公が孤独にさいなまれる状況が描き出されながらも、流刑囚としての生活そのものは、実はかなりのんびりとしたものであり、一見すると自由気ままなものであったことがうかがい知れる。ただし、それが果たしてどの程度パヴェーゼ自身の実体験と重なっており、どの部分が完全なる創作部分なのか、その区別がいまひとつ判然としない。また、作品のなかに、主人公が村の子供たちと交流する様子やラテン語を指導する場面などは描かれてはいない。初の長編「牢獄」には、主人公ステーファノの他に、別の政治犯が一人登場している。この点では唯一の流刑囚であると語っていた手紙の記述とは矛盾するものの、他にも流刑囚がいたとする村人の発言と作品内容とは合致している。

ちなみに、「牢獄」における主人公ステーファノの流刑地での暮らしぶりとは次のようなものである。午前中はカフェで村人と語らい、夜ふけから早朝にかけては部屋で孤独に身をゆだねることを好む。夏には海水浴をし、秋には友人らと村祭りに足を運んだり狩りをしたりし、クリスマスには村の男たちと一緒に娼婦選びをしたりもする。さらに、ステーファノは流刑地でコンチャという名の女に出会う。ゼラニウムを飾った家に住む、野性的な雰囲気漂わせる彼女にステーファノは強い憧れを抱くのだが、その一方で、日々身の回りの世話をしてくれる母親のような女エレナとひそかに関係を持つようになるのである。

果たして「牢獄」に描かれるステーファノの生活は、パヴェーゼが実際に送った生活をどの程度反映したものなのだろうか。手紙に読まれたとおり、パヴェーゼはブランカレオーネにおけるただ

一人の流刑囚だったのか。それとも他にも流刑囚はいたのか。パヴェーゼと村人たちとの関係は、実際にはどのようなものだったのか。

[2]

パヴェーゼの人生における流刑体験の重要性に注目し、パヴェーゼ自身の流刑体験と作品への影響に焦点をあてて研究を続ける研究者に、ジョヴァンニ・カルテリ (Giovanni Carteri) がいる。ブランカレオーネに生まれ、現在は近隣の街ボヴァリーノに暮らすカルテリは、これまでにパヴェーゼに関する三冊の本、『神話という流刑をめぐって』(原題: *Al confino del mito*, 1991)、『アガペーの花』(原題: *Fiori d'agape*, 1993)、『コンチャのゼラニウム』(原題: *I gerani di Concia*, 2005) を出版しており、1994年には『神話という流刑をめぐって』が評価されて、パヴェーゼ賞およびアマンテア賞を受賞している。

報告者はブランカレオーネを訪ねた際、現地での調査を様々な面で手助けしてくれた、カルテリの友人でもある医師ヴィンチェンツォ・デ・アンジェリス (Vincenzo de Angelis) 氏に、すでに絶版となって久しい『神話という流刑をめぐって』を見せてもらうことができた¹¹⁾。するとそこには、カルテリが1990年に行った村人らへの聞き取りをまとめた内容が記録されており¹²⁾、パヴェーゼが残した手紙や作品のみからはうかがい知ることのできないパヴェーゼの流刑生活ぶりが記されていた。

以下しばらくは、カルテリの調査記録に目を向けてみることにしたい。

[3]

『神話という流刑をめぐって』(以下、『神話』)の中に明らかにされるパヴェーゼの流刑生活ぶりを知る手がかりのひとつに、パヴェーゼが政治的な人間ではなく、博学な人物であるということが、流刑地到着直後に村人らの知るところとなり、パヴェーゼは多くの村人に受け入れられ、「教授」と呼ばれ慕われていたということが挙げられる。パヴェーゼを取り締まるはずの巡査マリアーノ・リチョッポ (Mariano Riccioppo) もパヴェーゼに一目置き、かなりの自由を認めていた。パヴェーゼには時に村の中心部から3キロほど離れたブランカレオーネ・スーペリオレと呼ばれる古い地区へと足を運ぶことや、近隣の街ボヴァリーノまで行くことなども許されていたという。

パヴェーゼは村の若者らと親しくし¹³⁾、村の子供たち数名に、間借りしていた部屋のなかでラテン語の個人授業をしていた¹⁴⁾。夕方にも、部屋の外には若者らがよく集まっていた。パヴェーゼが読書や執筆に没頭しているとき以外は、みなで庭や浜辺で一緒にカードゲームをしたり、おしゃべりをしたりして過ごしていたようである¹⁵⁾。

また、パヴェーゼは週2回、近くの床屋に髭剃りに行く習慣があった。当時は髭剃りにかかる費用は1回1リラだったが、村人の多くはお金ではなく小麦やオイル、クルミやワインなどで支払っていた。その床屋のニーノ・ダミーコ (Nino Damico) ともパヴェーゼは親しくしており、ダミーコはパヴェーゼから一切お金を受け取ることがなかったという。

[4]

ブランカレオーネの村人たちのなかでもとくにパヴェーゼと仲が良かったのは、パヴェーゼが住むパラッツォのすぐ隣に住んでいた、オレステ・ポリーティ (Oleste Politi) であった。パヴェーゼ

より4つ年上のポリーティは、「牢獄」における主要登場人物ジャンニーノのモデルとなった人物である。パヴェーゼはブランカレオーネに滞在中、バール・ローマへ行くにも、床屋へ行くにも、ほとんどいつでもオreste・ポリーティと出かけていた。

また、「牢獄」のなかの主人公の流刑生活ぶりと同じく、パヴェーゼは流刑地にて、村のアンジェロ・マクリ (Angelo Macri) という名前の男を中心に、オreste・ポリーティを含む数名の村人たちとお金を出し合い、フェツルツァーノという村からコンチェッタという名前のコールガールを呼ぶことがあった。9月に村で行われた聖母マリアの祭りにも、パヴェーゼはポリーティを含む村人たちと一緒に参加した。

そのポリーティは、何らかの罪によって1935年12月から1936年1月まで、逮捕監禁されていた。この間、パヴェーゼは詩作が全くできなくなるほどに落ち込んだらしい¹⁶⁾。

オreste・ポリーティとパヴェーゼとの親交は、パヴェーゼが村を去って以降も、パヴェーゼが自死を遂げる直前まで続いていた。パヴェーゼがブランカレオーネを去った後、ほと

んど時をおかずしてポリーティはトリノーのパヴェーゼを訪ねたそうである。そして、トリノーで一人の女と知り合い結婚すると、妻となったその女とともにブランカレオーネへと戻り、塗装業を営んで暮らした。

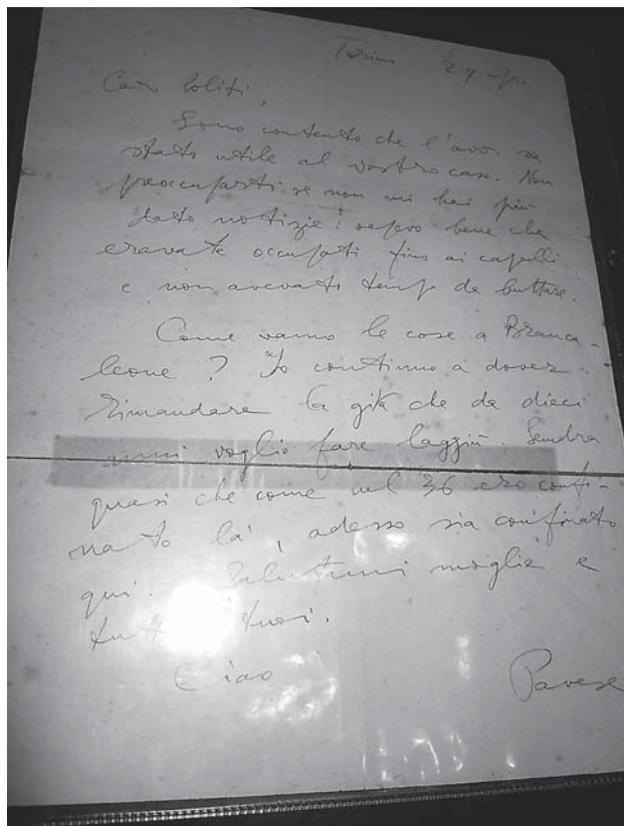
確かに、報告者自身が現在村にいる人々に尋ねてみても、パヴェーゼがポリーティと親しくしていたらしいということ、多くの村人が語ってくれた。実際にポリーティの家を訪ねてみると、そこにはパヴェーゼから届いたという3通の手紙が残されていた。いずれの手紙も日付の記載がないものの、たとえばそのうちの1通には、ポリーティがブランカレオーネから送った小包がパヴェーゼのもとに届いたこと、トリノーでブランカレオーネを懐かしく思い出しているということなどが記されており、ブランカレオーネを離れて以降もパヴェーゼがブランカレオーネの友人と連絡を取り合っていたということが確認できた。

[5]

カルテーリの調査によれば、「牢獄」に登場する、主人公が魅了される野性的な女コンチャと、主人公が関係を持つ女エレナにも、モデルとなった女が実在した。

コンチャのモデルとなったのは、ブランカレオーネでクンチャという愛称で呼ばれていたコンチェッタ・デルフィーノ (Concetta Delfino) である。他方、エレナのモデルとなったのは、アリーチェ・ポンタローロ (Alice Pontarolo) という名の女性である。

コンチェッタは、パヴェーゼがブランカレオーネに滞在した当時はまだ18歳であり、アリーチェ・



ポントローロの家で住み込みの家政婦として働いていた。パヴェーゼは日課となっていたバルや床屋へ向かう途中、毎朝、彼女たちが住む家の前を通過していたという。コンチェッタはたいていまますぐな縞模様の服を着ており、ジプシーのような雰囲気、つねに誰かに喧嘩を売っていた。時にはパヴェーゼに、女好きのポリーティをよく見張っておくよう叫んでいたという。

上記の内容については、1990年当時にカルテリが調査を行った際、カルテリがアリーチェ・ポントローロから聞き出しているものである。他の証言者は、コンチェッタについての証言を行わなかったのか、あるいはカルテリが『神話という流刑をめぐって』のなかに他の証言者によるコンチェッタに関する証言を取り上げなかった可能性などが考えられる。

このコンチェッタ・デルフィーノのパヴェーゼ作品への影響について、カルテリは後の作品『コンチャのゼラニウム』のなかでもさらなる検討を行っている。カルテリによれば、コンチェッタから醸し出されるジプシー風の雰囲気、しっかりとした腰付きと足首、日焼けした肌、甕で水を運ぶ姿のなかに、パヴェーゼはかねてから思い抱いていたギリシャ神話のメタファーや暗示を見出した。そして初の長編「牢獄」に登場することになったのが、山羊のような顔をして、村の男たちの間を飛び歩く褐色の肌の娘、コンチャであった。このコンチャのイメージこそ、後に手掛けられることになる神話的対話篇『レウコとの対話』におけるアルテミスのイメージへと踏襲されてゆくのである。

他方、エレナのモデルに関しては、村人の証言によるのではなく、カルテリ自身が、アリーチェ・ポントローロこそがモデルとなった女性であるとする考察を試みている。

そもそも1990年に聞き取り調査が行われた際、どうやらブランカレオーネの人々の間では、パヴェーゼとの間に何らかの関係がかつてあったのではないかと噂された女性として、ヨランダ・ロッシ (Jolanda Rossi) という名前が挙がっていたようである。しかし、カルテリはそれを真っ向から否定する。パヴェーゼとヨランダ・ロッシの間には、村人が噂するような関係も、ヨランダ・ロッシが「牢獄」におけるエレナのモデルである可能性も、どちらもなかったと断言するのである。

カルテリの説明によれば、ヨランダ (通称ヨレ)・ロッシは、パヴェーゼと同年であり、当時、夫とは別居状態にあった¹⁷⁾。他方、アリーチェ・ポントローロは、未亡人となったためにヴェネツィアからブランカレオーネへとやってきた、パヴェーゼよりも15歳年上の女性だった。パヴェーゼがブランカレオーネにいた当時は未亡人であったものの、その後、アリーチェはブランカレオーネの銀行創設者であり、すでに妻も子供もいたモレッティという名前の人物の愛人となり、生涯ブランカレオーネで暮らした。

カルテリは、「牢獄」のエレナが主人公に発するいくつかの会話に典型的ヴェネト方言が認められることや、エレナが主人公に対して「わたしはお前のママよ」と述べていること、さらに、当時のアリーチェ・ポントローロが、パヴェーゼ最後の恋人とされるアメリカ人女優コンスタンス・ドーリング (Constans Dawling) と瓜二つの美人であった点などをふまえ、流刑地でパヴェーゼがひそかに思いをよせ、「牢獄」におけるエレナのモデルにした女性は、ヨランダ・ロッシではなく、アリーチェ・ポントローロであると述べる¹⁸⁾。ただし、ヨランダ・ロッシやアリーチェ・ポントローロ、そしてコンチャに対して、パヴェーゼが恋心くらいは抱いていたかもしれないものの、実際に村人たちが噂するような直接的関係や、「牢獄」に描かれる主人公とエレナのような関係などはなかったと考えられる、ともカルテリは記している。

[6]

続いて他の流刑囚に関する記述に目をむけてみたい。カルテリが調べたところ、パヴェーゼの他に、シチリアのサン・アガタ・ミリテッロから来た弁護士フランゼッティ (Franzetti)、ピエモンテ州アレッサンドリア県トルトーナ出身、無政府主義者であり絵描きでもあったマウロ・ジョルジ (Mauro Giorgi)、ミラノの会計士であり無政府主義者であったガイド・パオラ (Guido Paola)、ローマの小説家で、妻と一緒に暮らしていたジョヴァンニ・クイリコ (Giovanni Qilico)、ジェノヴァ出身のブルーノ・カラマーイ (Bruno Calamai)、以上計5人の流刑囚がブランカレオーネにいた。

マウロ・ジョルジは、この5人のなかでも特に熱狂的な無政府主義思想の持ち主だった。当時、パヴェーゼに一目置き、自身の13歳になる娘ヨレに個人授業を頼んでいた巡査は、ジョルジがパヴェーゼに被害を及ぼさないよう、ブランカレオーネの中心地から3キロほど離れた山の上にある、ブランカレオーネ・スーペリオレと呼ばれる古い集落にマウロを移したのだという。

カルテリの見解によれば、他の5人の流刑囚のうち、短編「流刑地」に登場するオティーノのモデルになったと考えられるガイド・パオラ、および短編「ジプシー」に登場するカルレットのモデルになったと考えられるブルーノ・カラマーイと、パヴェーゼは親交を持っていた。パヴェーゼは、ブランカレオーネの海岸沿いにある兵舎付近に住んでいたとされるパオラと、しばしば海水浴をし、岩礁のうえで語り合った。また、カラマーイとはほとんど離れがたいほどの仲であり、ホテル・ローマや砂浜などに一緒にいる姿がよく目撃された。夕食もほとんど毎日のようにパヴェーゼの部屋で一緒にとっていた。ブルーノ・カラマーイとパヴェーゼが親しくしていたということについては、『神話』の中でジャンニ・ピエモンテという人物も同様の証言をしている。

[7]

その他、1990年当時にカルテリが行ったパヴェーゼを記憶する村人たちへの聞き取り調査によれば、パヴェーゼは流刑期間中いつもつば広の帽子をかぶり、パイプをくわえ、ダブルの黒いジャケットを身に着け、小脇には本を抱えていた。そして、読書に励み、内気な性格で皮肉っぽく、しかし上品な物言いで多くの人物を魅了していた。

パヴェーゼは政治に大変精通し、反ファシズムの精神を持ちあわせていた。しかし、共産主義者や社会主義者であったというわけではなく、政治的議論のなかにあえて身を置こうとはしなかった。パヴェーゼはブランカレオーネ滞在中、カラブリア州の社会党創設者であり、ブランカレオーネで最も教養高い人物でもあったヴィンチェンツォ・デ・アンジェリス (Vincenzo de Angelis) の家をひそかに訪れることが何度かあったが¹⁹⁾、その際にも政治的な話ではなく、ギリシャ神話や古典文学について語り合っていた。

カルテリが『神話』に記した証言や、当時のカルテリの考察結果をみると、手紙や作品に読まれるとおりのパヴェーゼの内心は確かに孤独であったのかもしれない。しかし、一方では村人たちに受け入れられ、それどころかかなり良好な関係を築いていた様子、村の友人らとともに過ごす時間が多かった様子などがうかがい知れる。姉への手紙に記された、「朝、ミルクを沸かしたあと、コーヒーを飲み、バルへ行く」という単純な一文の向こうに、オreste・ポリーティの存在やブルーノ・カラマーイの存在、床屋のダミーコ、パヴェーゼに敬意を寄せる巡査リチョッポ、パヴェーゼを慕い集まる若者たちの姿が、浮かび上がってくるのである。

また、短編第一作「流刑地」に登場するオティーノやチッチョ、コンチェッタという名前の娼婦、さらには長編第一作の「牢獄」の主要登場人物であるガエターノ（＝グイド・パオラ）、警官（＝リッチョポ）、丘の上のアナーキスト（＝マウロ・ジョルジ）、コンチャ（＝コンチェッタ・デルフィーノ）、エレナ（＝アリーチェ・ポンタローロあるいはヨランダ・ロッシ）等に、モデルとなる人物が実在したということも、『神話』を通してはじめて明らかになる。

しかしながら、『神話』に記されていることが果たしてすべて真実なのか、その点にいささかの不安を抱かずにはいられないのもまた事実である。その理由は、1990年にカルテリが行った聞き取り調査の対象者がいずれもかなり高齢である点、パヴェーゼがブランカレオーネに滞在した当時の彼らの状況、つまりはいかなる政治的立場の人物であったのかということが明らかにされていない点、調査対象者自身とパヴェーゼとの関係性が、ジャンニ・ピエモンテとアリーチェ・ポンタローロを除いては、全く記されていない点などにある。

カルテリの調査対象者はいずれも、パヴェーゼがとても良い人物であり、村人はみなパヴェーゼに好意を寄せていた、と語っている。では何故、2012年春に報告者がブランカレオーネを訪れた際は、大半の村人たちがパヴェーゼを冷やかに受け止めていたのかが判然としない。かつて良好に受け止められていたのであれば、それが多少なりとも今日に至るまで引き継がれていてもよさそうなものである。

しかし、パヴェーゼの流刑体験以後、今日までの間に、パヴェーゼの流刑生活ぶりについて当時を知る人物から直接聞き取り調査を行ったのはジョヴァンニ・カルテリただ一人である。今となつては当時を知る人物がほとんどいない点などをふまえると、カルテリの『神話』は、パヴェーゼの流刑体験に焦点をあてて研究を進める者にとって、たとえ入手困難な本であるとはいえ、今後も唯一の底本になるといえるだろう。

カルテリがまとめた村人とパヴェーゼとの交流ぶりの真偽のほどについては、もはや記載されている内容を記憶するものや、それを裏付ける証拠がきわめて乏しいため、今日、ブランカレオーネで改めて検証しなおすことはほとんど不可能である。

そこで報告者は、パヴェーゼ以外にも5人いたとされる流刑囚の存在を裏付ける証拠を探してみることにした。交友関係を示す証拠は得られずとも、同時期に流刑囚が存在していたということ自体は、どこかに残されているはずの公文書記録などから確認できるのではないかと考えたのである。

第三章：その他の流刑囚をめぐって

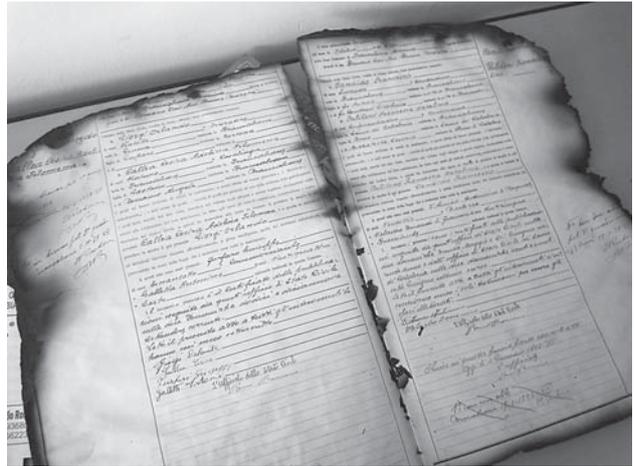
[1]

1935年から1936年にかけてブランカレオーネにいたとされる流刑囚の存在を裏付ける証拠を探すため、報告者はまず、ブランカレオーネの役場を訪ねてみた。しかし、そこには流刑囚の存在を裏付けるような資料やパヴェーゼに関する資料は何ひとつ残っていなかった。

続いて、かつてのバル・ローマの所有者の姉（あるいは妹）と、流刑囚のひとりであるマウロ・ジョルジとの結婚証明書を探しだすことができないものかと改めて役場を訪れた。すると、かつての火事にも拘らず、奇跡的に残っていたオルランド・ジョルジ (Orlando Giorgi) なる人物の結婚証明書を発見した。そこには、1938年1月17日に、カッレア・チェシーラ (Callea Cesila) という名

の人物と結婚した旨が記されていた。

マウロ・ジョルジではなくオランダ・ジョルジと署名されていたため、果たしてそれがカルテリが記していた流刑囚と同一人物であるのかどうか判別しかねたものの、証明書の記載内容を見ると、チェシーラと結婚したジョルジはジェノヴァ生まれであり、職業欄には装飾家と記されていた。『神話』には、マウロ・ジョルジに関して、ピエモンテ州アレッサンドリア県のトルトーナ出身の無政府主義者であり、絵描きであるとの説明がなされている。アレッサ



ンドリアはジェノヴァ北方に位置し、距離的にも近いこと、また、職業に関しても記載内容が類似していることなどから、カルテリが村人からマウロ・ジョルジと伝え聞いた流刑囚のうちの一人は、本当はオランダ・ジョルジという名前だったのではないか。

しかし、もしマウロ・ジョルジなる人物が本当はオランダ・ジョルジという名前であったとすれば、他の流刑囚たちについても、村人らの記憶違いや、政治的流刑囚であることからブランカレオーネで偽名を使っていた可能性などが懸念される。そして、もし記憶違いや偽名の使用により、カルテリが聞き出した名前と実際の名前とが異なるのであれば、いくらカルテリの調査結果をもとにして流刑囚に関する公文書等を探し出そうとしても、発見にはいたらない可能性がある。ブランカレオーネで確たる資料が得られず再び途方にくれていたところ、幸いにもジョヴァンニ・カルテリ本人に、短時間ながら会う機会を得た。

[2]

ブランカレオーネに向けて日本を発つ前、ブランカレオーネを訪れるならば、パヴェーゼの南イタリア体験に焦点を当てて研究を続けるジョヴァンニ・カルテリにぜひ会ってみたいと報告者は考えていた。ところが、ブランカレオーネに到着直後、カルテリの友人でもあるデ・アンジェリス医師にその旨を伝えたところ、あいにくカルテリは病気療養中であり、人と会える状況にはないということを知った。面会はあきらめ調査を続けていたのだが、しかし、幸いにも報告者がブランカレオーネを発つ前日、2012年3月13日の夕刻に、ボヴァリーノにあるカルテリ氏の自宅にて30分程度話をする機会を得ることができた。

実際に会ってみると、話に聞いていたほどには重篤な様子に見えなかったのでひとまず安心した。そのうえで、パヴェーゼが流刑地にいた当時、他にも流刑囚がいたということを裏付けるような何らかの証拠を探し求めていることを告げたところ、カルテリから、政治的流刑囚に関する一切の資料がローマの国家中央資料館 (Archivio Centrale dello Stato) にあるということを教えてもらった。「1935年」、「ブランカレオーネ」、「流刑囚」という3つのキーワードを受付で伝えるだけで、関連する資料をすぐに見せてくれるはずであるとのことだった。

ちょうどブランカレオーネを発ち帰国するまでの数日間はローマに滞在する予定であったため、報告者は引き続きローマの国家中央資料館において、パヴェーゼがブランカレオーネにいた1935年8月から1936年3月の間に、同じくブランカレオーネにいたとされる流刑囚の存在を裏付ける証拠

を探してみることにした。

[3]

ブランカレオーネを発ちローマに到着すると、報告者はすぐさまローマの国家中央資料館に赴いた。そして、「1935年から1936年の、カラブリア州ブランカレオーネに滞在した政治的流刑囚について調べたい」と、カルテーリに教えられたとおりに担当者に尋ねた。ところが、流刑囚の名前がわからない限り、必要な資料を探し出すことは難しいと告げられた。というのも、ファシズム政権下における政治的流刑囚に関する資料はすべて流刑囚の苗字のアルファベット順にリストが作成されており、地名や年号からは資料を探し出せない仕組みになっていたからである。

やむなく報告者は、『神話』にあげられていた流刑囚ら5人の名前を手掛かりに資料をリストから探し出そうとした。しかし、証言した村人たちの記憶違いか、あるいは偽名が使われていたのか、あるいは政治犯ではなかったのか、ともかくフランゼッティという名のシチリアの弁護士や、パヴェーゼと親交があり、「ジプシー」という短編の登場人物のモデルにもなったとされるミラノの会計士グイド・パオラについては、リストのなかにその名前を発見することができなかった²⁰⁾。

また、妻と住んでいたとされる、ローマから来たジョヴァンニ・クイリコに関しては、カルテーリが『神話』に記したスペルである Giovanni Qilico とは別のスペル、Giovanni Battista Quirico で発見できた。しかし、確かにクイリコはブランカレオーネに流刑されていたものの、公文書記録によれば、逮捕されたのが1937年6月18日、流刑宣告を受けたのが1937年7月29日であり、パヴェーゼのブランカレオーネ滞在期間、すなわち1935年8月5日から1936年3月14日とは重なっていないことが判明した。

したがって、今回の調査でパヴェーゼと同時期にブランカレオーネにいた政治的流刑囚としてローマの国家中央資料館で確認できた書類は、オルランド・ジョルジとブルーノ・カラマーイ、この二人に関するものである。

[4]

国家中央資料館に保管されている流刑囚オルランド・ジョルジに関する資料には、1909年3月23日ジェノヴァ生まれ、職業は装飾家と記されている。ジョルジは、1933年8月6日に共産主義者の容疑で逮捕され、アレクサンドリアの刑務所で5年間のブランカレオーネへの流刑宣告を受けた。パヴェーゼのように途中で恩赦が認められることはなく、1938年8月6日の刑期満了日までを流刑囚として過ごしたのだった。

ブランカレオーネで見つけることができた、オルランド・ジョルジの結婚証明書の記載と職業や出生地などが一致していること、政治犯的流刑囚リストのなかに、マウロ・ジョルジなる人物の名前が発見できなかったことなどを考慮すると、カルテーリが『神話』にマウロ・ジョルジと記していた人物は、正しくはオルランド・ジョルジという名前であったと推定できる。さらに、結婚証明書に記載されていた日付が1938年1月17日であったことから、たしかにジョルジは流刑囚の身でありながら村人と結婚していたということがわかる。

ジョルジはパヴェーゼがブランカレオーネに到着する2年もまえに流刑宣告を受けており、すでにパヴェーゼがブランカレオーネに到着する以前からブランカレオーネにいた。このことから、ブランカレオーネに到着早々、パヴェーゼが姉に宛てた手紙の中に自分自身が唯一の流刑囚だと記し

ていた点に関しては、到着直後であったためにジョルジの存在に気付かなかったという可能性、離れて住む姉に向けて自身の孤立感をなるべくあおるよう意図的にそのように記した可能性、他の流刑囚の存在に言及してはいけなかった可能性などが考えられる。

一方、ブルーノ・カラマーイについては、幸いにもカルテリが『神話』に記したとおりの名前で資料を発見することができた。1905年9月17日ジェノヴァ生まれ、職業欄には会社員と記されているブルーノ・カラマーイは、1935年12月7日に無政府主義者の罪で逮捕された。1936年2月7日に、ジェノヴァの刑務所においてブランカレオーネへの2年間の流刑宣告が言い渡されている。

気になるのはカラマーイの流刑宣告日である。パヴェーゼは1935年7月15日にローマの刑務所で流刑宣告を受け、その後数日間をローマで過ごしたのち、二晩かけてローマからブランカレオーネに移動し、8月前半にブランカレオーネに到着した。宣告を受けてから実際にブランカレオーネに到着するまでに、約三週間を要している。

一方、カラマーイの場合は、ローマからブランカレオーネへと移動したパヴェーゼとは異なり、ジェノヴァからの移動ということになる。ブランカレオーネまで汽車を乗り継いだのか、あるいは船で移動したのか、その点が定かではないものの、ローマからブランカレオーネへの移動よりも、ジェノヴァからブランカレオーネへの移動の方がはるかに時間はかかるはずだ。にもかかわらず、1936年2月7日に流刑宣告が下されたということは、翌月の14日には恩赦が認められてブランカレオーネを脱したパヴェーゼのことを考えると、どれほど大目に見積もってもわずか1か月足らずの期間しかふたりのブランカレオーネ滞在時期が重なっていないことになる。そのような短い期間で、果たして流刑囚どうしが急速に接近し、村人らに語られたような親密な親交を深め得たのかどうか疑問が残る。

MINISTERO DELL'INTERNO
DIREZIONE GENERALE DELLA P. S.
Divisione AFFARI GENERALI E RISERVATI
CONFINO POLITICO

PERIODO PER
Giorgi Orlando di Gaspare
leser Culotta nato il 23.3.1909
Guerra dimorante a Genova
emung. composizione della famiglia.
professione o mestiere decoratore se è ex combattente no
Colore politico Comunista
Assegnato al confino di polizia per anni 5
Commissione Provinciale di Alessandria con ordinanza del 13.9.1935
in seguito a Nulla Osta Ministeriale del _____
Commissione d'Appello nella seduta del 30.10.1935
di RESPINGE IL RICORSO
Capo del Governo _____
Data 6.8.1938 Libera per fine periodo 6.8.1938
(da aggiornare)

MINISTERO DELL'INTERNO
DIREZIONE GENERALE DELLA PUBBLICA SICUREZZA
Divisione Affari Generali e Riservati
CONFINO POLITICO

Calamai Bruno di Orto
e di Gerri Girolamo nato il 11.9.1915
a Genova dimorante a _____
Stato Chile composizione della famiglia
professione o mestiere impiegato se è ex combattente _____
Colore politico Apolitico VALLA
Assegnato al confino di polizia, per anni 2
dalla Commissione Provinciale di Genova con ordinanza del 2.2.1936
in seguito a Nulla Osta Ministeriale del _____
La Commissione d'Appello nella seduta del _____
decide di _____
S. E. il Capo del Governo _____
Decorrenza 2-12-1935 Scadenza 2-12-1937
(da aggiornare)
ANNOTAZIONI Proibito da S. E. Capo Governo Sede di confino Brancaleone
accensione produzione Impura. dalla G. Orto (leggi Calamai)
Sede di confino (da aggiornare)

いずれにしても、国家中央資料館において、当時ブランカレオーネにいたとされるパヴェーゼ以外の5人の流刑囚のうち、2人の資料については発見に至らず²¹⁾、1人はパヴェーゼとは滞在期間が全く重なっていなかったことが判明した。また、村人たちにマウロ・ジョルジという名前で知られ、そのようにカルテリが記録していた人物は、実際にはオランダ・ジョルジという名前であったこと、パヴェーゼと大変親しい間柄だったとされる流刑囚ブルーノ・カラマーイとはせいぜい1か月足らずしか滞在期間が重なっていなかったこと、しかし、いずれにしてもパヴェーゼが流刑地で過ごした期間中、パヴェーゼ以外にもブランカレオーネには少なくとも2人の政治的流刑囚がいたということが明らかになった。

結びにかえて

以上が2012年春に行った調査報告である。

ブランカレオーネでは、もはやパヴェーゼの痕跡をたどることは難しく、当時のパヴェーゼを記憶する者ももはやほとんど存在しないということ、現在いる村人たちの多くに、パヴェーゼが否定的に受け止められていること、しかし昨今、パヴェーゼを村の観光に利用しようとする動きがみられることなどが、今回の調査で明らかになった。

また、ジョヴァンニ・カルテリが1990年に行った聞き取り調査を検討したことにより、パヴェーゼ自身による手記や作品からは想像しがたい、多くの友人や若者に囲まれた、流刑地での比較的自由的な暮らしぶりが明るみになった。さらに、パヴェーゼ自身による書簡のなかには、自分が流刑地における唯一の流刑囚だと記されていたが、公文書記録をたどることで、少なくともパヴェーゼ以外に2人の流刑囚が当時ブランカレオーネにいたということも確認できた。

なお、本稿の後半では思わぬかたちでカルテリの著書内容の不完全さを明らかにしてしまった。しかし、カルテリの著書がなければパヴェーゼの流刑生活ぶりに関してはパヴェーゼ自身による手記や作品から類推するほかに、実際にカルテリに会った際に得た助言がなければ、当時の公文書等がローマの国家中央資料館に存在するということが報告者は知り得ないままであった。したがって、ジョヴァンニ・カルテリをはじめとする今回の調査に協力してくれたすべての人たちに感謝したい。

なお、今回ローマの国家中央資料館で収集した資料によって、パヴェーゼの逮捕、流刑、恩赦をめぐる様々な事柄が新たに確認できた。それについては機会を改めて報告を行うことにする。

注

- 1) 河島英昭(以下、河島)は、1935年5月15日トリノにおける一斉検挙ののち、訓戒処分を受け釈放された者たちとして、ジュリオ・エイナウディ、ルイーダ・サルヴァトレリ、ノルベルト・ボッピオ、バットイスティーナ・ピツアルドその他と記している。(『パヴェーゼ文学集成』第一巻、岩波書店、2008年、356頁参照。)
- 2) 「牢獄」は1938年11月27日から1939年4月16日にかけて執筆された。しかし、実際に出版されるのは1948年12月のことである。出版に際しては、別の長編「丘にある家」(原題: *La casa in collina*)とともに、『鶏が鳴くまえに』(原題: *Prima che il gallo canti*)という総合タイトルが付けられた。「牢獄」と「丘にある家」は、一連のパヴェーゼ小説のなかで自伝的要素の強い二作品とみなされている。
- 3) パヴェーゼ生誕100年を記念して刊行された『パヴェーゼ文学集成』第一巻の解説に、河島自身がブラ

- ンカレオーネを訪ねた際の様子記された箇所がある。しかし、そこには、パヴェーゼの流刑生活ぶりに関する検討や、現在の村人たちにパヴェーゼがどのように受け止められているかということへの言及は見られない。むしろパヴェーゼの逮捕や流刑の経緯、ファシズムとの関係性、パヴェーゼを流刑地に追いやったとされるバッティスティーナ・ピッツアルドという女性との関係等に焦点が置かれている。同じく2008年、イタリアではジャンフランコ・ラウレターノ (Gianfranco Lauretano) のエッセー『パヴェーゼの軌跡』(原題: *La traccia di Cesare Pavese*) が出版された。しかし、パヴェーゼとブランカレオーネに関しては、流刑宣告をめぐる経緯や流刑地で書かれた詩や手紙等についての言及にとどまり、ここでもパヴェーゼ自身の流刑生活ぶりが改めて追われているわけではない。
- 4) 8月9日に記されたパヴェーゼの姉への手紙には8月4日にブランカレオーネに到着したと記されているものの、公文書には8月5日にブランカレオーネにパヴェーゼが到着した旨が記録されている。
 - 5) Cesare Pavese, *Lettere 1926-1950*, a cura di Lorenzo Mondo e Italo Calvino, Einaudi, Torino, 1966, pp.273-274.
 - 6) *Ibid*, p.275.
 - 7) *Ibid*, p.276.
 - 8) *Ibid*, p.275.
 - 9) 2012年2月27日、ブランカレオーネで長年小学校の高校を務めた、1929年生まれの子ジュゼッペ・フレノ (Giuseppe Freno) の証言による。
 - 10) パヴェーゼが滞在する部屋を有するパラッツォの所有者トニーノ・トリンガリ氏、パヴェーゼについて1冊本を書いているブランカレオーネの小学校の元事務員ジュゼッペ・ファーヴァ氏、ブランカレオーネで医者を務めるヴィンチェンツォ・デ・アンジェリス氏らの証言による。
 - 11) Giovanni Carteri, *Al confino del mito: Cesare Pavese e la Calabria*, Rubbettino, 1991.
 - 12) 当時の主な証言者として、コンソラート・ヴァラストロ (Consolato Valastro)、ガエターノ・カラベッタ (Gaetano Carabetta)、ミーコ・コンデーミ (Mico Condemi)、ジャンニ・ピエモンテ (Gianni Piemonte)、アリーチェ・ポンタローロ (Alice Pontarolo) が挙げられている。
 - 13) その名が挙げられているのは、マンガラヴィーティ (Mangraviti)、ボンファ (Bonfa)、ペッピーノ・カルテーリ (Peppino Carteri)、アンジェリーノ・パレルミーティ (Angelino Palermi) の4人である。
 - 14) 『神話という流刑をめぐる』の中では、巡査の娘ヨレに教えていたということは記されているものの、それ以外の人物名は明らかにされていない。
 - 15) よく集まっていた者として、ガエターノ・カラベッタ (Gaetano Carabetta)、ドメニコ・ファッレッティ (Domenico Falletti)、アレッサンドロ・トマジーニ (Alessandro Tomasini)、ドン・デコ (Don Deco)、ジョヴァンバッティスタ・カルティザーノ (Giovambattista Cartisano) の名が挙げられている。
 - 16) どのような罪でオレステ・ポリーティが逮捕されたのかについて、報告者自身調べようと試みたものの、村には記録が残っておらず、ポリーティの家族も誰一人知らなかった。しかしジュゼッペ・フレノによれば、その逮捕理由は、「牢獄」に登場するジャンニーノのような別の村の女を孕ませるといった内容の罪ではなく、覚えてもないほどのとてもつまらない罪状による逮捕だったとのことである。
 - 17) 報告者が村の人からヨランダ・ロッシについて尋ねたところ、彼女は夏の期間だけブランカレオーネにやってくる、大変美しい女性だったと教えてくれた。
 - 18) カルテーリは1990年の調査当時94歳であったアリーチェ・ポンタローロの口から、「パヴェーゼは決して口にはしなかったが、私のことを気に入っていた。毎朝彼が立ち止まって、私の方を見るたびに、わたしにはそれが分かった。」という証言をも引き出している。
 - 19) このヴィンチェンツォ・デ・アンジェリスは、報告者の調査に協力してくれた、同じ名前のブランカレオーネの医師ヴィンチェンツォ・デ・アンジェリスの祖父にあたる。
 - 20) 報告者が、フランゼッティやパオラを調べるべく国家中央資料館で目を通したのは、政治的流刑囚冊子「433」・「747」号である。そこに記録が保管されている人物は以下のとおりである。パヴェーゼと流刑期間が重なり、ブランカレオーネに流刑されていた人物は見当たらない。

Busta	名前	分類	流刑宣告日	流刑地	期間	注記
433	Fraino Giuseppe	Antifascista	1937/4/28	Terraferma	3	
	Franco Clotilde	Apolitico	1934/11/9	Taurianova	2	
	Franco Gregorio	Apolitico	1939/3/30	Ustica?	3	
	Francolini Annibale	Comunista	1928/1/25	Lipari	3	
	Francolini Giuseppe	Comunista	1938/2/15	Tremiti	5	
	Franconi Normanno		1943?			資料不足。ただし手紙等に1943年の日付。
	Frangiamore Enrico	Apolitico	1939/2/2	S.Domino	5	
	Frangini Aladino	Comunista	1942/10/27	Ventotene	3	
	Frangini Ambrogio	Antifascista	1928/8/2			資料不足。
	Frangini Giulio	Antifascista	1942/8/25	Campobasso	2	
	Frangioni Giuseppe	Antifascista	1938/12/15	Ventotene	2	
	Frangioni Otello	Comunista	1933/10/30	Taurianova	2	
	Franzenelli Luigi	Antifascista	1940/11/30	Tremiti	3	
	Franzini Alberto	Apolitico	1941/4/15	Castel.S.Giorgio	5	
	Franzoni Oreste	Antifascista	1940/1/26	Ventotene	3	
	Franzoso Placido Ermenegildo	Socialista	1936/7/7	Tornimparte	3	
747	Paola Alfio	Antifascista	1940/9/16	Fagnano Castello	3	
	Paoletti Bruno			Diffidato		
	Paoletti Cesare	Antifascista	1937/3/8	Tremiti	2	
	Paoletti Giovanni	Apolitico	1933/8/17	Calvallo	1	
	Paoletti Giuseppe	Comunista	1941/3/15	Ventotene	2	
	Paoli Guerrino	Comunista	1842/8/13	Carunchio	3	
	Paoli Giovanni	Comunista	1929/12/9	Termoli	5	
	Paolich Giuseppe		1935/1/23	Roccanova	5	分類については手書き文字判読不可。
	Paoli Spartaco	Anarchico	1930/3/31	Ponza	5	
	Paolinelli Attilio	Anarchico	1927/11/28	Ponza	4	
	Paoli Pasquale	Comunista	1930/4/18	Ponza	5	
			1936/11/6		5	
	Paoleschi Adamo	Anarchico	1937/4/6	Ponza	2	
	Paolillo Pasquale	Antifascista	1938/11/30	Colobrarò	3	
	Paolini Giulio					Commutato in diffida
	Paolini Duilio					Ammonito
	Paoloni Guido	Apolitico	1937/12/27	S.Dometrio dei Vestini	1	
	Paolotti Giovanni	Antifascista	1941/3/26	Avezzano	2	
Paoli Dino					Ammonito	

21) 資料発見に至らなかった可能性としては、証言者の記憶違い、流刑囚が偽名を使っていた可能性、政治的流刑囚ではなかった可能性などが考えられる。ファシスト政権のもとでは流刑処分にあった者は政治囚だけではなかった。これについては報告者自身がブランカレオーネで村人から情報を集めていた際、1939年生まれであり、長年ブランカレオーネで駅長を務めたジョヴァンニ・スクンチャ (Giovanni Scuncia) が語ってくれた。また、上村忠男著『カルロ・レーヴィ「キリストはエボリで止まってしまった」を読む——ファシズム期イタリア南部農村の生活——』にも同様の記述がある。上村の著書によれば、当時は政治囚以外に、マフィアなどの一般刑事犯罪で流刑された者もいたが、しかし、流刑囚の圧倒的多数は政治囚であって、マテーラ県だけでも、ムッソリーニ政権期間中に2500名の政治囚が流刑されてきた。(上村忠男著『カルロ・レーヴィ「キリストはエボリで止まってしまった」を読む——ファシズム期イタリア南部農村の生活——』、平凡社、2010年、24頁参照。)

(本学大学院博士後期課程)